



腫瘍内科学講座

新しいがん薬物治療を切り拓く



主任教授 佐治 重衡

腫瘍内科学講座は2014年9月に誕生した全く新しい講座・診療部門です。

佐治が前任の京都大学から、木村礼子先生が京都府立医科大学から福島に異動してこの講座がスタートしました。漫画「ブラックジャックによろしく」(佐藤秀峰)にもできますが、欧米諸国や韓国などでは抗がん剤や分子標的治療薬などの薬物療法を専門に扱う、腫瘍内科医という専門医がいます。内科医が研修医のときに外科を研修したとしても、自分で胃癌の手術をすることはなく、同じように、外科専門医が、複雑な抗がん剤治療や分子標的治療まで全てを高いレベルで担うことはおそらく不可能です。もちろん「ではのかみ」(アメリカでは…)は本質的な意味をなさないで、米国と同じ方法をとる必要はありませんし、実際、外科医が診断から終末期までの治療全般をカバーしてきた日本では、外科医も薬物療法の経験をしっかり積んで診療にあたっています。

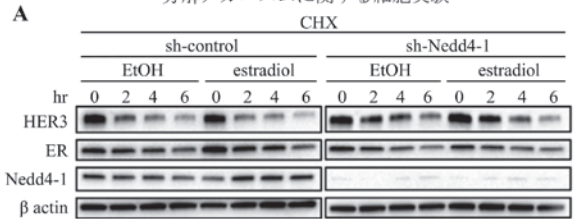
一方、日本人の2人に1人はなんらかのがんに罹患し、毎年10種類以上の複雑な作用メカニズムを持つ新しい抗がん薬が増えていく現代医療では、薬物療法を専門的に扱う腫瘍内科医のニーズは年々高まっています。日本臨床腫瘍学会の腫瘍内科専門医(がん薬物療法専門医)も1,000名をこえ、やっと患者さんにもその存在が認知され始めるようになりました。とはいえ、福島県には数人の専門医しかいませんが。

少ない専門医で、幅広い需要に対応するために、主科となる様々な診療科の先生と併診の形で患者さんの治療を



「ブラックジャックによろしく」より引用
著作：佐藤秀峰

乳癌の新規治療標的HER3の分解メカニズムに関する細胞実験



須賀 淳子 (大学院) BBR, 2018.

行う、複雑な合併症をもつ患者さんや血管肉腫、NET、原発不明癌などの稀な腫瘍に関してはできるだけ主となって治療を行うなど工夫をしています。新規抗がん薬の開発治療では、未知の有害事象への対応などで専門的なノウハウが必要であり、しています。また、これら新規薬剤の開発と併行しながら、その作用メカニズムを解明する基礎研究をわたくしたちのラボでおこなっています。

2人ではじまったこの講座は、東京都立駒込病院化学療法科から佐々木栄作先生、本学血液内科学講座から野地秀義先生、さらに放射線治療専門医でもある阿左見祐介先生が薬物療法の研鑽のために加わりました。専攻医としては、製薬企業の開発部門に在籍したこともある名取穰先生が本講座の仲間となりました。順天堂大学の乳腺外科医である徳田恵美先生も2018年から講師として加わり、診療・研究活動が活発になってきました。みんな全く違う背景と得意分野をもつ寄せ集め集団で(失礼)、大学院生・研究生も臨床検査技師、薬剤師、国立がん研究センター医師と、バラエティに富んだ人材が集まりました。

歴史をひもとくと、新しい時代は既存の概念から離れて新たな価値観を生み出すことにより訪れます。この福島の地で、新しいがん薬物治療を切り拓いていきます。

